

「活動の概要と研究成果」

NO.J2407

活動題目：エネルギー資源をめぐる日中関係史
—上海と漢口における石炭貿易を中心に(1840～1937)—

所属： 東京大学人文社会系研究科

氏名： 張 瑤

本研究は、近代において日本産の石炭が大量に中国に輸出されていたという現象に注目し、物の流通と人のネットワークという二つの側面から近代中国石炭市場の実態を検証しつつ、エネルギー資源をめぐる経済発展と政治外交的衝突という二つの視点から、日中関係の複雑な実像について検討するものである。

2年間の助成期間を通して、申請者は寧波市檔案館、上海市檔案館、南京の中国第二歴史檔案館、武漢の湖北省檔案館、及び台北の中央研究院近代史研究所檔案館を中心に史料を行った。日中石炭貿易の実態、及びに貿易参与していた人々の状況に関する史料を大量に収集した。

その成果として、社会経済史学会、閩浙贛区域史工作坊、量化史学講習班、AFC未来会議、新史料与近现代中外关系国際学術研討会などの日本国内外の学会で、日中英語での口頭発表を行った。また、中国社会科学院の学術雑誌『近代史研究』2023年第4期で、「近代上海市場的中外煤炭競争」という論文、及び東洋文庫の学術雑誌『東洋学報』105巻第4号で、「近代日中石炭貿易における中国人商人—上海市場を中心に」という論文を発表した。さらに、2025年3月、「エネルギー資源をめぐる日中関係史」という博士論文で審査に合格し、東京大学大学院人文社会系研究科の文学博士の学位を取得した。

結論として、上海における石炭供給は、長期にわたり海運に依存しており、最初は日本炭が圧倒的な優位を占めていたが、1920年代になると日本炭・撫順炭・開灤炭へと多様化した。一方、武漢市場では、鉄道・内河航路・長江航路という複数の交通手段に恵まれ、様々な供給源から石炭を獲得していた。その結果、日本炭から中国産の石炭、再び日本炭および撫順炭、そして再度中国産の石炭へと供給源の変化を繰り返した。このように、日本炭は長年にわたり、重要なエネルギー資源として近代中国の経済成長を支え、同時に先鋒として近代日中貿易の拡大を促進していた。一方、日本炭や撫順炭の輸入は、中国国内の石炭産業の発展を妨げ、エネルギー供給の安全保障における課題も生み出した。